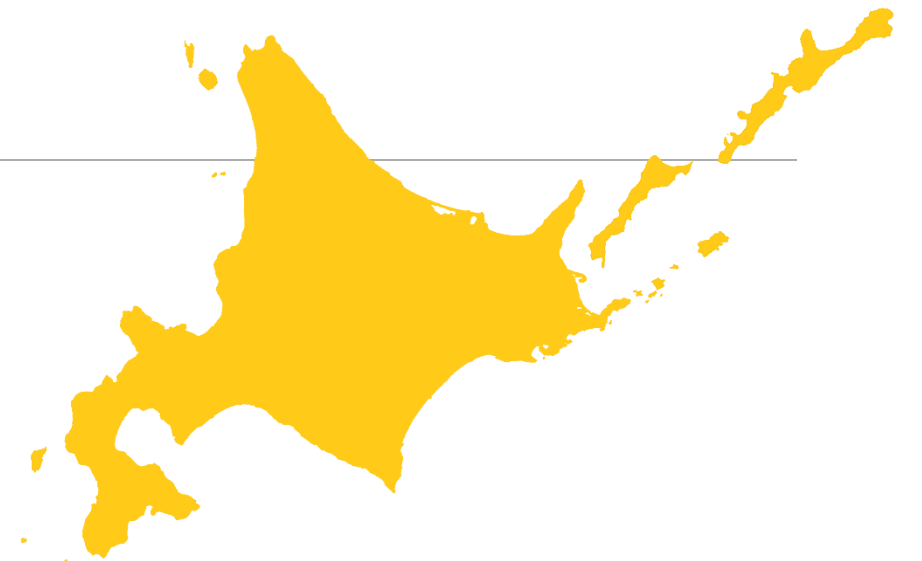


北海道における献血者 確保の取組



はじめに

北海道では、血液の人口に対する使用量が他都府県に比べ高く、献血も多く集めなければならないことから、他都府県よりも、多くの献血協力を必要としている。

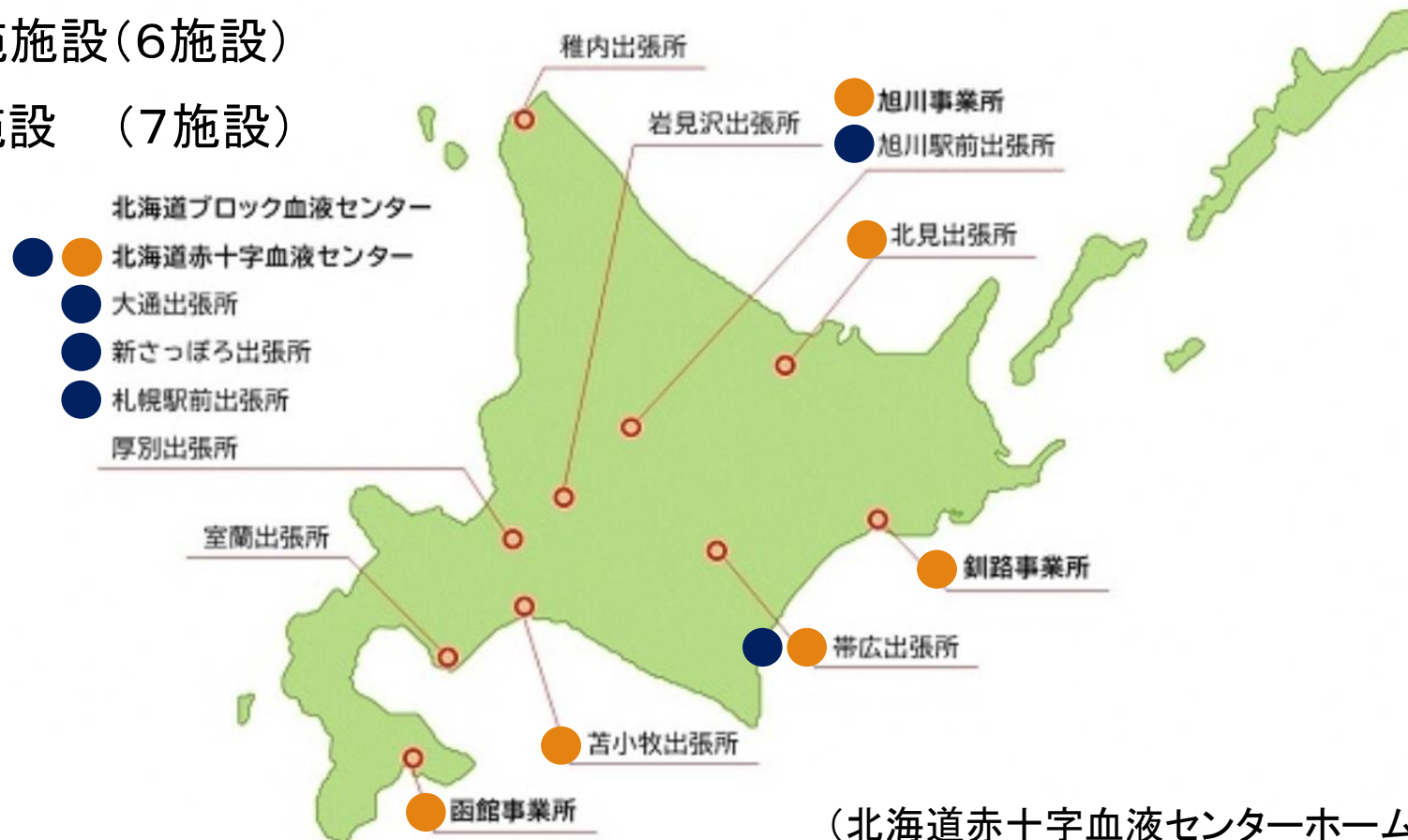
そのため、北海道の全人口にあたりの献血率は、7.6%（全国1位）となっている。

本日は、献血者確保に関する取組や今後の課題、若年層に対する主な取組を紹介する。

北海道内の血液センター施設所在地

●: 献血ルーム実施施設 (6施設)

●: 献血バス実施施設 (7施設)



(北海道赤十字血液センターホームページより一部加工)

各事業所の宿泊行程数(令和2年度)

	1泊2日	2泊3日	3泊4日	4泊5日	計
北海道赤十字血液センター (札幌)	2回	8回	0	0	16回
苫小牧出張所	2回	0	0	0	2回
旭川事業所	0	0	6回	11回	17回
北見出張所	0	0	0	9回	9回
釧路事業所	0	7回	8回	0	15回
帯広事業所	0	6回	0	0	6回
函館出張所	6回	6回	1回	0	13回
北海道センター合計	16回	27回	15回	20回	78回

※稼働数 32稼働 81稼働 60稼働 100稼働 273稼働

令和2年度の移動採血車稼働数は2,896回。上記宿泊稼働は273回
よって、約1割が宿泊行程となっている。

北海道が抱える課題

①各市町村への献血推進活動

全血献血の（200mL・400mL）令和2年度実績を見ると、献血バスが140,001人、固定施設が62,912人で献血バスで約70%を確保していることから、献血バスの事前PRが重要となっている。

②宿泊行程中の天災対応

近年、国道や道道の通行止めが頻繁に発生する。北海道内で献血された血液は全て札幌の血液センターへ運ばれるため、宿泊行程で既に献血バスが現地にいたとしても、札幌までの輸送経路が通行止めとなった場合には献血を実施することが出来ない。

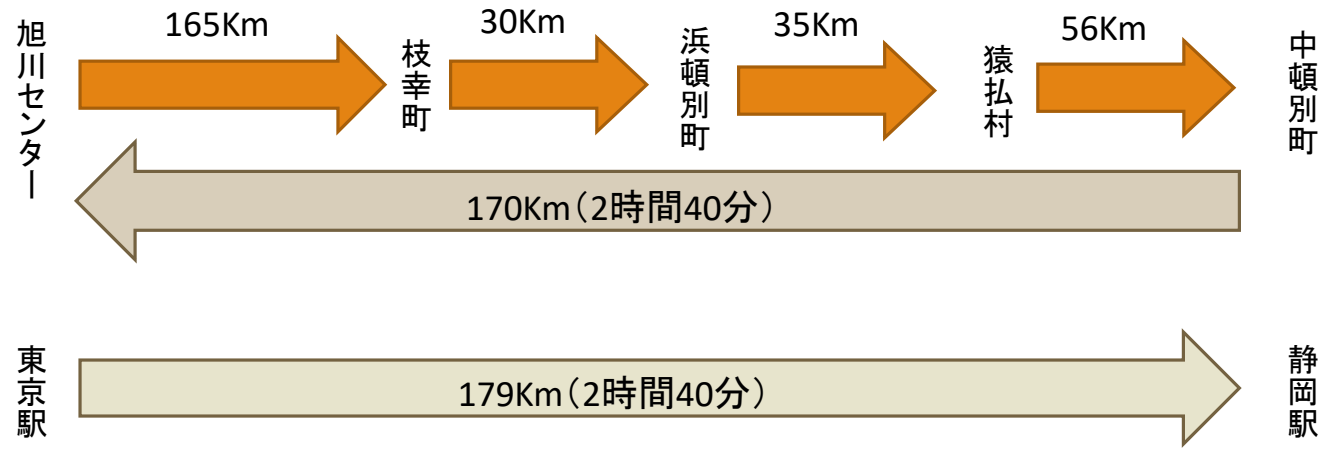
北海道が抱える課題

③宿泊行程の移動時間

宿泊行程については、献血実施市町村への移動時間が概ね90分以上かかる場合、付近市町村を含めて宿泊行程としている。

その場合、約1日分は移動時間として取られ献血協力を得られない。

例



献血制度に係る教職員研修会 (平成27年度～平成29年度)

目的

- ・小・中・高等学校の教職員等を対象に、献血の状況や日本赤十字社の保健活動などについての理解を深め、高等学校の科目「保健」における保健・医療制度の仕組みや民間の機関の活動などの指導を充実するとともに、小・中・高等学校での献血についての正しい知識の普及啓発を促進する。

主催・共催

- ・主催：北海道、北海道教育委員会 共催：北海道ブロック赤十字血液センター

内容

- ・説明① 献血の現状や北海道の取組などについて
- ・説明② 高等学校の保健体育における献血等の取扱いなどについて
- ・説明③ 日本赤十字社の保健活動、献血に触れ合う機会などについて

モデル校における授業実践研究 (平成29年度～令和元年度)

目的

- ・ 将来の献血を支える高校生等の若年層が献血の意義や制度、健康被害救済制度などについて理解を深めることが重要であることから、授業実践校での取組を広く普及するなどして、高等学校等における献血に関する指導の充実を図ること

教育課程における位置づけ

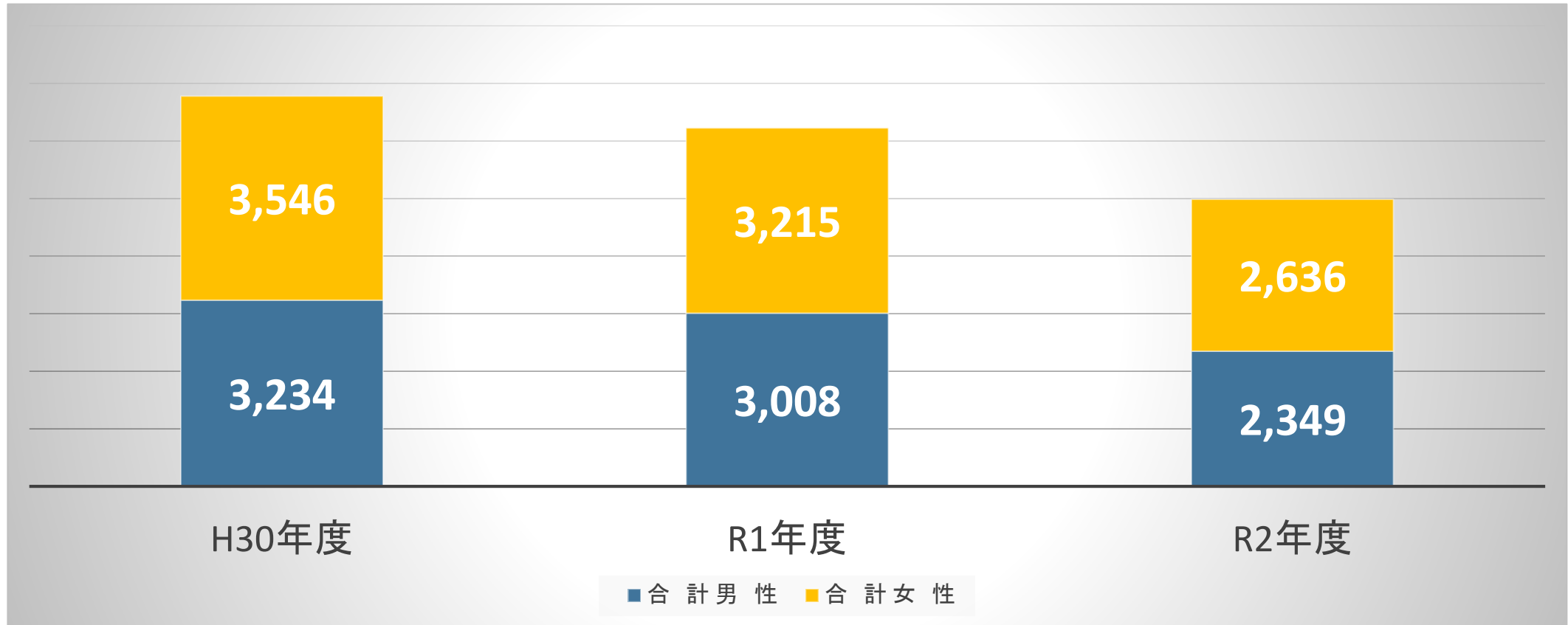
- ・ 献血に関する内容は、保健体育科の科目「保健」のほか、理科などの関連教科、特別活動、総合的な探求の時間など

モデル校における授業実践研究 (平成29年度～令和元年度)

授業実践研究の内容・方法

- 献血の意義や現状に関する理解を深める取組
- 献血の課題を理解し、解決方策を考える取組
- 学び、考えたことを発信する取組
- 外部関係機関等との連携した取組
- 事前事後アンケートの実施

高校生の献血者数推移（北海道）



まとめ

新型コロナウイルス感染症の影響により、学校のオンライン授業や企業のテレワークが進むなど、人々のライフスタイルを大きく変化した。

献血者の確保や啓発活動についても、この変化に合わせて、様々な方法により取り組む必要がある。